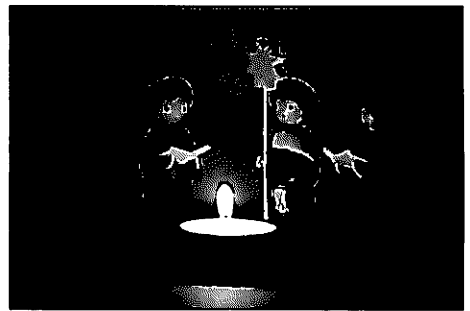


## クレンデに見るドイツ少年合唱の一流流

井 上 博 子

### はじめに

ドレスデンから南に50kmほど下がったチェコとの国境、ザクセン州の南部にザイフェン Seiffen という町がある。エルツ山脈地方は、ドイツのクリスマスにゆかりの深い伝統的な木工芸品の生産地として名を知られ、ここでは「エルツ山脈地方の民芸品」Erzgebirgische Volkskunst と呼ばれる木工芸品が生産されている。多数の木工芸品の中にクレンデと呼ばれる合唱隊の木製人形がある(図1)<sup>1)</sup>。



(図1)

3人または5人1組になっているものが多く、形態は多種多様である。共通しているのは、白い襟、黒のマント、帽子をかぶり、先頭の1人はランタンと大きな星のついた長い棒を持っており、ほかのメンバーは楽譜を持って歌っているということである。長い棒の先の大きな星は東方の三賢者をベツレヘムに導いた星を表す。

クレンデとは、貧しいラテン語学校の生徒たちが町を回り歩き、家々の前で聖歌を歌っては、わずかな喜捨を受けた少年聖歌巡回合唱隊のことである。現在もザイフェン地方では、年に1度、かつての習慣に由来する伝統行事が行われている。

クレンデ Kurrende や、クレンダーナー Kurrendaner (クレンデの構成員) という名称は、ラテン語の currenda に由来する。その語源は、苦勞してかき集めるという意味の corrado で、喜捨という名の物乞いをして、苦勞して小銭をかき集めるということであるが、その currenda が currende へ、そして Kurrende と変化したのである。<sup>2)</sup>

クレンデの名称は、現在では少年合唱団の名称の一部<sup>3)</sup>として、あるいは、音楽グループ名として、合唱または合唱団活動を表す言葉として使われてはいるが、クレンデ人形に表現されるような活動を、伝統を引き継ぎながら今なお行っているということではないと思われる。クレンデとしての活動はどこかで区切りがついている筈である。

クレンデは、どこから始まり、どのような経緯を辿って変遷し、そして今は、どうなっているのか。人々は何故この人形をクリスマスシーズンは勿論、一年中飾って愛おしむのか。人形となって今も愛され続けているクレンデの起源はどこにあるのか。本論文は、クレンデの歴史と意義、行方を問い、ドイツ少年合唱の一流流を探るものである。研究についての主な資料を MGG の記述に求め、クレンデの発生、背景、歴史、現在に受け継がれたものを調査する。また、マルティン・ルターやヨーハ

ン・ゼバスティアン・バッハも少年時代、その一員として歌っていたという事実から、ルターとバッハの足跡を手がかりとして、当時のクレンデの在り方や位置づけを探る。最後に、クレンデの歴史が、現在のドイツの少年合唱にどのように反映されているかを、ベルリン大聖堂聖歌隊を事例として記述する。

## 1. クレンデの少年たち

### (1) クレンデの発生

MGG<sup>41)</sup>は、クレンデの概念を

中世から19世紀の初頭まで、貧困な階層の少年、とりわけラテン語学校の合唱教育を受けた低学年のクラスの、大抵は古風な服装（例えば、黒い円形のマントと垂れた房飾りのついた帽子）を身につけて、副カントール（「監督者 *praefectus*」、「先唱者 *praecentor*」、「聴講者 *auditor*」）の指導の下、決められた時に金銭や物と引き替えに、路上や、公共の場所、または、家から家、そして、時たまの特別の招待において歌うことを許可された団体。<sup>5)</sup>

と、記述している。

「貧困階層の少年」とされる根本は、貧しい少年たちが学校で学ぶに至った経緯に遡るであろう。ミュンヘン大学教授であったハンス・フリードリヒ・ローゼンフェルトと弟のヘルムート・ローゼンフェルトによる『中世後期のドイツ文化』に、以下のような記述がある。

カール大帝（742～814）の時代に聖職者養成学校が必要だとわかったので789年のアーヘン教会会議で各修道院に学校を創立することが定められた。カールの聖職者試験『勅令集』は書くこと、読むこと、歌うこと、いくらかラテン語ができること、正確に計算できること、祈りや歌、宗教上の祭日暦、儀式を憶える能力だけを要求していた。それらはやがてフルダ、ザンクト・ガレン、ライヒェナウ、ヒルザウ、ヴァイセンブルクの修道院学校のように優れた精神文化を育成する場となっていった。入学は7歳から8歳で、15歳で生徒は修道士になるか否か、修道生活に入るか否かを決定し、18歳で誓約を取り消すことができ、24歳までに司祭叙階式を受けるか否かを決心すれば良かった。その後10世紀にもなれば、司教座聖堂学校や司教座聖堂付属学校（修道院付属学校）もつくられるようになった。それらの学校は聖務共唱の祈りを務める司教座聖堂参事会員の後継者の教育を目的としていたので、貴族出身であることが入学条件であった。その後、この種の学校は「二重学校」、すなわち自分たちの後継者のための学校とそれ以外の人々、つまり助修士、貧しい庶子、軍務能力に欠ける貴族、新米の教区司祭、すべての層の市民のための学校に変化した。また、そこへの入学はほとんど聖グレゴリウスの日（3月12日）に行われた。

このような学校のトップには付属神学校長がいて、校長は「若人の指導者」、そのほか補助教員として遍歴学生、歌の教師として合唱指揮者を雇用していた。学校での躰は厳しく、規律をまもり注意力を促すために魔法の杖として鞭が使用された。<sup>6)</sup>

育ち盛りの子どもたちは、規律の遵守のためばかりでなく、様々なことを理由に「躰のための魔法

の鞭」と称して容赦なくむち打たれた。また、修道院や司教座の付属機関として設立された学校では、子どもたちの読み書きや計算の能力だけでなく、カトリックの教義によるキリスト教思想の教化が重要な任務であり、そのために「歌うこと」は大きな役割を果たした。「歌」は修道院学校では重要な科目であった。

すでに以前から独自の教区学校を設立する要求があった。1215年の第4回ラテラノ公会議<sup>7)</sup>は、全教会に、貧しい生徒のための無償授業をするよう教師に依頼すべしと決定したので、彼らに読み方、教会の典礼、歌が教授されるようになった。かれらはこの無償の授業を受け、合唱団員やミサの侍者になり、勉強を続けて、問答形式の授業において教区主任司祭を支え、最終的に自らも地方の司牧職につく生徒もいた。<sup>8)</sup>

この記述からは、貧しい少年たちが学ぶことの代償として歌うことになった経緯を窺い知ることができる。

## (2) アイゼナハのクレンデ

アイゼナハは、Johann Sebastian Bach ヨーハン・ゼバスティアン・バッハ（1685～1750）生誕の地である。町楽士ヨーハン・アンブロジウスの第8子として生まれたバッハは、少年時代の10年間でこの地で過ごし、聖ゲオルク教会付属ラテン語学校で学んだ。マルティン・ゲックは、アイゼナハ時代のバッハについて、

かつてルターは貧しさから、アイゼナハの市民たちの家々の前で、またその墓のかたわらで、クレンデの一員として歌うことを強いられたが、その貧しさと、バッハもまた無縁ではない。<sup>9)</sup>

と述べている。

バッハが通った聖ゲオルク学校は1525年にルター派となるが、マルティン・ルター Martin Luther（1483～1546）が、バッハから遡ること200年前に同校の前身であるフランシスコ会修道院学校で学んだのは、1498年から1501年の4年間<sup>10)</sup>、15歳から18歳の時である。一方、バッハは、1694年に母を、1695年に父をなくし、相次ぐ両親の死により、10歳の時にオーアドルフ Ohrdruf の兄に引き取られたため、アイゼナハのラテン語学校で学んだのは、1693年から1695年までの3年間、8歳から10歳の時である。

ここで出てくる第一の疑問は、ルターが街々で喜捨を請い、歌い歩いたとされる年齢が、クレンデの定義とされている、ラテン語学校の「低学年」という設定から大きく外れているということである。同じようにクレンデで活動したとはいいいながら、活動時の年齢が大きく異なる。ルターがクレンデで活動していたとされる年齢は、殆どの少年が変声を迎えているだろうと思われる年頃である。これはどういうことを意味するのだろうか。この疑問の解明については、後述する。

更にゲックは、オーアドルフに引き取られたバッハについて、

外的な状況は、たしかにこの孤児にとって快適といえるものではなかった。兄の収入はわずか

で、住居は狭かった。若いバッハはラテン語学校にクレンデ歌手として籍を得られたことを喜んだであろう。それはおそらく学業と並んで、さまざまな辛い義務を若いバッハに課したであろうが。<sup>11)</sup>

と記述している。ルターからバッハの時代にかけてのクレンデの活動が、少年たちにとって好ましいものではなく、進んで取り組む自主的なものではなかったということが窺える。「籍を得られたことを喜んだ」のは、歌うことによってなにがしかの対価を保証されたからであろう。だが、歌い歩く貧しい少年たちに対する蔑視もまた大きかった。MGG には、

ルターは、彼のマクデブルクとアイゼナハの学校時代において（1497～1501）、自ら、一片のパンを求める小僧として、路地を移動した。そして、力を込めて貧しい生徒たちに対する軽蔑に對抗した。<sup>12)</sup>

と記述されている。後にルターは、説教の中で説いている。

「神の愛のために少しのパンを、といて戸ごとに乞い歩く子どもたちを排斥してはならない」とルターはいう、「私自身このような乞食生徒として、戸外に歌いながらパンを求めた。殊になつかしいアイゼナハの町にいたころそうであった。」（『児童就学の義務に関する説教』）<sup>13)</sup>

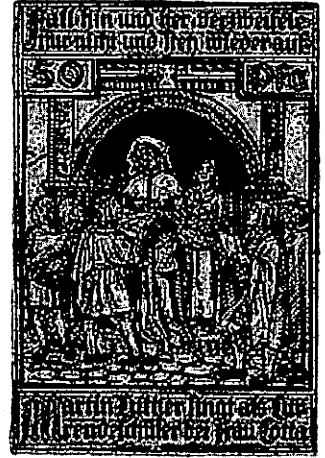
ルターは、1517年10月31日、ヴィッテンベルク城教会の扉に、95か条の論題を張り出し、それをきっかけとして、数々の宗教的・政治的混乱を解決し、宗教改革という大きな変革を成し遂げる。それと同時に、ドイツ語によるコラールの作曲者としても知られている。樋口隆一は、次のように記している。

ルターが約1年間ヴァルトブルク城に隠れている間に、ヴィッテンベルクはひどい混乱に陥った。学生たちは暴れ回り、教会や祭壇を冒瀆したのである。そこでルターはふたたびヴィッテンベルクに戻り、秩序を回復し、それから四半世紀にわたり、さまざまな改革に乗り出した。

1523年末には、『ヴィッテンベルク教会のためのミサおよび聖餐式の規則』を出版しているが、その中でルターは「私は、ミサのとき、グラドゥアーレのすぐ後やサンクトゥスやアニュス・デイの後で、人々が自国語で歌える、できるだけたくさんの歌があればよいと思う」と述べている。作曲家ヨハン・ヴァルターの協力により1524年にヴィッテンベルクで出版された賛美歌集には、約40曲の讃美歌が収められているが、その半数はルター自身によって作られたものである。ルター派の讃美歌は、コラールまたはキルヒェン・リート（教会歌）とも呼ばれ、後のバッハの宗教曲でも重要な役割を演じるものである。ルターは、神の御言葉である聖書は、それまでのように司祭によってラテン語で朗読されるのではなく、会衆が理解できるドイツ語に訳されねばならないと考えたが、それと同様に、神を讃える歌もまた、それまでのようにラテン語の聖歌やモテットやミサ曲だけではなく、ドイツ語で、しかも会衆に親しまれた旋律で歌われるべきだと考えたのである。<sup>14)</sup>

従来のカトリック教会では、音楽は専門の聖歌隊に任されて、一般の信者はただ黙って聴いているだけだった。ルターは音楽による民衆の教化をめざし、あらゆる人々が参加できる簡単なものを理想とした。礼拝に参加する会衆が、ドイツ語のコラールによって神を共に賛美することができるようにと、昔からドイツに伝わる民謡や歌曲、グレゴリオ聖歌などから編曲し、プロテスタント教会のための新しい賛美歌コラールを誕生させ、教育的価値としての音楽の本質を明らかにした。教会礼拝音楽の中に、新たに位置づけが生まれたのである。<sup>15)</sup>

図2<sup>16)</sup>は、「マルティン・ルタークレンデの歌い手としてコッタ婦人宅にて歌う」とあり、家の門口で歌っている少年たちが描かれている。ルターは、アイゼナハのコッタ家で生活し、ウルズラ・コッタは母親のような存在であった。他の親戚がルターを引き取らなかったからだという。ルターはコッタ家で、つつましく敬虔で、音楽を愛する貴族の家庭生活を知るようになった。アイゼナハにおけるルターの姿を、心理学者エリク・ホーンブルガー・エリクソン Erik Homburger Erikson は、

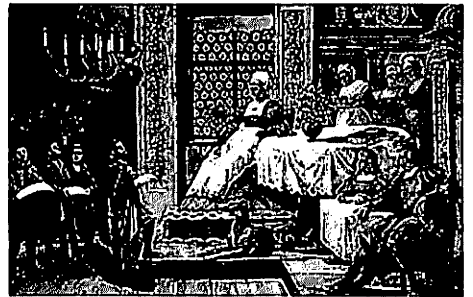


(図2)

いずれにせよ、マルチンがまだ小さな子供だったころ、いろいろな辛苦をなめさせられていた彼のほんとうの母親とおそらく共有できたはずのこの豊かな想像力や音楽の才能を、この孤独な少年の中に見いだしたといわれる第二の母がマルチンに与えられたというこの伝説に注意することは大変興味深いことである。また、この伝説は路傍で歌を歌って糧を得る若きマルチンの不朽の姿をも提供している。<sup>17)</sup>

と述べている。

図3<sup>18)</sup>には、「ルターはクレンデの学生としてコッタ婦人の前で歌う」との注記がある。コッタ家の室内と思われる場所の、一段低いところで歌っている。このように室内に招き入れられて歌ったこともあるのだろう。この絵のクレンデの生徒たちは、絵で見る限りにおいては、低学年の少年ではなく、ルターがアイゼナハで暮らしたという15歳から18歳にかけての年頃に見える。



(図3)

ルターはクレンデの学生としてコッタ婦人の前で歌う

前述のように当時のラテン語学校は、規則が厳しく、禁止事項が多く、それに背くと容赦なく罰せられた。自由に話したり、衝動的に話したりしてはならなかっただけでなく、方言で話すことも禁止されていた。それどころか、「ドイツ語を使ってはならない」という規則すらあった。むちで打たれたりなぐられたりという体罰は、躾のために不可欠として容認されていた。成瀬治は、ルターが13歳になるまで過ごしたマンスフェルトのラテン語学校の様子を下記のように記述している。

主要科目のラテン語はといえば、マルティンのような才能のある子どもでも、いささか面食らわずにいられない、機械的な詰め込み教育だった。なにしろ、ひとつの教場に新入生も上級生も一緒くたにすわらせ、同じ教師が一方で格変化や動詞の活用を教えながら、そのあいだに一方ではやさしい単語だの、時によると「主の祈」「十戒」「アヴェ・マリア」などのかなり長い文章を棒暗記させる、といったあんばいなのである。<sup>19)</sup>

ラテン語学校での体験を、ルターは『卓上語録』<sup>20)</sup>の中で

わたしはかつて何ら理由もないのに昼前に15回も叩かれたことがあった。というのは、名詞の変化、動詞の変化を学んでおくように命ぜられたのに、学習しなかったからであった。<sup>21)</sup>

と語っている。

アイゼナハのラテン語学校も例外ではなかった。厳しい寒さの中歌い歩く「神経質になっている」少年たちは、ほうびにソーセージを与えようと近づく男性の声にさえ怯えて逃げ散ったという伝説からは、少年たちの日々の暮らしと心の奥底を窺い知ることができるが、この伝説に関してもルターは、『卓上語録』の中で、次のように語っている。

キリストはわたしたちにご自身を現し罪を赦してくださった。にもかかわらず、わたしたちはキリストの面前から逃げるのである。故郷で子供の頃、同じようなことが、ソーセージを集めるために歌を歌っていたときにも起きた。その時、一人の市民がわたしたちに冗談を言いながら叫んだ。「おい、君たちは何をしているのだい、これとこれを君たちにあげよう」と言いながら、ソーセージを二つもってわたしたち目がけて走り寄ってきた。私と仲間はその贈り物を提供してくれる人から逃げ去ってしまった。神に対しても私たちは同じように振る舞う。神はわたしたちにキリストとすべての賜物を贈ってくださるが、わたしたちはキリストから逃げ、キリストをわたしたちの裁き人のようにみなすのである。<sup>22)</sup>

『卓上語録』の体系的な記録は1531年の夏から始まったと推測される。ルターの生涯最後の15年間で記録され、語っているのは「老」ルターである。老ルターの脳裏に少年時代のクレンデの体験が甦った。15回も叩かれたことや、ソーセージをくれようとする市民から逃げたということが、このような「キリストから逃げる」という悔恨と懺悔の例えになって語られている。生涯忘れることの出来ない鮮烈な思い出であった。

辛い思いをしながらの活動ではあったが、クレンデとして町を歌い歩いたアイゼナハは、ルターにとって懐かしい町であった。聖ゲオルク学校での授業は、マンスフェルト時代の詰め込み教育に比べるとはるかに楽しかったし、ハインリヒ・シャルベ夫妻との出会いやウルズラ・コッタ婦人の庇護もあった。アイゼナハは、クレンデの活動と重なる、ルターにとって忘れがたい地となった。

## 2. クレンデの背景にあるもの

### (1) 中世から宗教改革・バツハの時代

中世から宗教改革の前までは、修道院が学問と宗教と音楽の中心だった。それぞれの修道会が修道院を中心に修行に励んでいた。次第に民衆への布教が重視されるようになり、説教を求める人々が教会堂に殺到した。民衆は説教により感化され、新しい人生を賛美することを求めた。説教活動を求める民衆の姿を「中世後期のドイツ文化」は次のように記述している。

イスラム教徒の対立およびヨーロッパでの異端運動は、1215年のラテラン公会議で要求されていた集中的な説教活動の必要性を再認識させることになった。フランシスコ会修道士とドミニコ会修道士が国民に熱狂的に受け入れられたのは、国民が強く説教活動を求めていたからであった。その証拠に、聴衆が殺到し、教会堂におさまりきれず、托鉢修道士たちは戸外で俄作りした説教壇から説教することが多くなった。説教が人気を博したのは、それまでの説教はたいてい諸教父からの引用文を用いて聖書解釈（聖書の章句に関する説教）をする程度だったのにくらべ、托鉢修道会のそれは入念に構成され、祭事を通して熱心におこなわれたので、その積極性が受け入れられたものと思われる。<sup>23)</sup>

中世都市の繁栄とそれとともなう大聖堂の設立によって、合唱音楽の中心は、修道士のグレゴリオ聖歌によるミサが行われていた修道院から教会に移っていった。このような状況を背景に、クレンデの仕事が増大して行った様子を MGG は次のように記述する。

第4ラテラン公会議（1215）の規範XI<sup>24)</sup>の遵守の中で、教区教会に組み入れられた学校（ラテン語学校または一般学校）は、中世の終わりまで、部分的にはその後も特定の教育要素の伝達の仕事ではなく、教会の補助的施設（「キリスト教のはしめとしての学校 schola ecclesiae ancilla」）として、まず第一にキリスト教典礼合唱曲の保証と保持のために利用された。これらの施設、とりわけ社会的に細分化した住民を持つ急速に成長した大きな都市において、教会合唱義務の主たる負担は貧しい生徒たち（「貧者たち pauperes」）に割り当てられた。そして彼らに人はお返しとして多くの場所でクレンデ的な歌を、多くの場合、週に2、3回午後には歌うことを容認した。お布施は托鉢修道会の例によって合法と認められ、その用語 Almosensammeln（慈善金募集）をクレンデの生徒たち die Kurrendaner（「物乞いをする人々 mendicatores、恩恵を受ける人々 beneficiarii、施しを受ける人々 eleemosinarii」）が、全般的に引き継いだ。<sup>25)</sup>

更に、クレンデの教会内外で活動が増え続けた様子について、MGG は続ける。

聖体行列や病人の聖体拝領の際に協力することもまた、中世の巡回音楽 Musica circularis の職務に属していた。宗教改革の前にはクレンデは更に、ドイツ語による歌曲の演奏を通して、平信徒に対して重要な教理問答的な仕事も果たさなければならなかった。<sup>26)</sup>

ルターは、神職者のみならずあらゆる人々が共に神を賛美することができるようにと、コラルを

推進し、自ら作曲もした。しかし、MGGによれば、宗教改革の前に、既にクレンデは、ドイツ語による歌曲の演奏を通して、教理問答的な仕事をしていたことになる。これは見逃せない事実である。ドイツ語のコラール作曲という大きな功績は、ルターのクレンデ体験が反映されたのかもしれない。

## (2) クレンデにまつわるトラブル

中世後期、クレンデの活動とクレンデの数が増大するに従って、困った事態が発生した。非合法の物乞い行為が急激に増加し、そのため、ニュルンベルクでは、クレンデの生徒たちへの金属製の徽章を支給して証明とし、その活動を保護した。この方法は、後の世紀においてもまた、クレンデの活動保護のために多くの場所で保持された対策のひとつである。

1695年、10歳の誕生日を前に両親を失い、オーアドルフの長兄に引き取られ、同地のラテン語学校に入学したバッハは、兄の元で熱心に学んでいたが、1700年3月、朝課合唱隊の隊員が求められていた北ドイツのハンザ都市リュネブルクの聖ミヒヤエル教会付属学校に転校した。ミヒヤエル学校には聖歌隊があり、朝課合唱隊の隊員は、その中核をなしていた。その主な任務は、聖ミヒヤエル教会の各日曜祝日の主礼拝における奉仕であるが、それに加えて、この聖歌隊から選ばれた隊員からなる合唱隊が、町の要人の家の前で歌って回ると言う任務を課せられていた。

リュネブルクには、8世紀に設立された聖ヨハネ教会があり、聖ミヒヤエル教会と並んで、町の主要な教会であった。聖ヨハネ教会にもラテン語学校があり、当然のこととして聖歌隊もあった。この聖ヨハネ教会の聖歌隊も同じ時期に町を歌って回る役割を担っていた。両方の聖歌隊の間には争いがしばしば起こり、この争いを避けるため、それぞれの聖歌隊が曜日ごとに回る通りとその順序を詳細に決めて、鉢合わせしないように配慮していたという。トラブルの解決について、樋口は、

リュネブルクの少年たちにとって、コルス・ジンフォニアクスに入ることは夢であった。かなりの小遣いも稼げたとし、将来は更に朝課合唱隊に入る可能性もあったからである。なお、このようなカントライは聖ヨハネ教会にもあり、両者は市内での門付けにしのぎを削っていた。縄張り争いで流血沙汰もあったようで、市当局は彼らの門付けが交錯しないように、巡回ルートに関する細かい規定まで設ける必要があったようだ。<sup>27)</sup>

と記述する。トラブルの解決策の殆どは、歌って回ることの制限であった。ニュルンベルクでは、クレンデ制度の改革のきっかけから、1588年に定められた10人ずつの生徒集団で、歌って歩き回るという規則が、はるか17世紀に至るまで続いた。

クレンデの在り方（特別な義務、受け入れ状況、参加者数、歌う時と道に関して、与える配分）は、領邦君主、または、市の当局から公布された教会そして学校規則によって定められていたから、独自のクレンデの規則もまた、様々に存在したのである。

## 3. クレンデが歌った歌 ― 少年合唱から男声合唱へ

クレンデが受け持っていたのは、主に単声部による歌であった。ルターの時代にはラテン語の聖歌を、バッハの時代にはドイツ語のコラールを単旋律で歌っていた。多声の音楽を演奏し、主に礼拝の仕事を任せられた合唱団は、「コルス・ムシクス」chorus musicusと呼ばれた。コルス・ムシクスは、



生徒たちは普通ソプラノを引き受けるのみで、多声部は補助的な合唱の列から市民たちによって受け持たれ、人数は増大していた。コルス・ムシクスはとりわけ日曜日毎の礼拝の時に、朝と夕べにおける日々の合唱団の仕事とはまた別に大きな使命を果たさなければならず、更に市民生活のすべての種類の祝祭に際して、礼拝のほかにも働かなければならなかった。

一方では、クレンデもまた礼拝において、主に朝の説教と毎週の礼拝、及び、臨時の行事の時には、礼拝の仕事を任されることがあった。クレンデとコルス・ムシクスのほかに、高度な合唱で装飾的に歌うことに専念していた同様に貧しいラテン語学校の生徒たちから構成されているコルス・シュンフォニアクス *chorus symphonicus* と呼ばれるグループもあった。コルス・シュンフォニアクスは、しばしば、先生やそれ以前の生徒（変声した OB 合唱団員）によって歌われる男声部を持っていた。そしてクレンデと同じように、パンのために家々の前で歌った。

この3つのグループは、それぞれに特徴があるが、学校合唱の歴史において登場した概念は、どこにおいても厳密には区別されなかった。MGG は、下記のように記述している。

16世紀にはより一層、夕べの礼拝と朝の礼拝、並びに葬式における単声合唱の職務は、クレンデの日常の仕事に属するようになった。ときたま多声合唱が1585年のシュパイアーや、1613年のシュターデにおいても要求され、その結果、コルス・シュンフォニアクスとクレンデの間の区別は、事実上殆どなかった。<sup>28)</sup>

前述のルターが所属していたクレンデは、ルターの年齢からしてコルス・シュンフォニアクスと呼ばれる、男声部を持つグループだったのではないかと推測される。

コルス・シュンフォニアクスには、バッハもまた所属していた。リューネブルク聖ミヒャエル教会付属学校に転校したバッハは、朝課合唱隊に空席があったので給費学生としての籍を得ることができたという。マルティン・ゲック『バッハ伝』には、次のように記されている。

バッハがリューネブルクで生活した場合は、「修道院」とはいっても、一般にイメージされる修道院とはずいぶん異なる。そこはむしろ、教会、「騎士学院」と呼ばれた貴族の子弟のための寄宿舎付きの学校、一般市民の子弟のためのラテン語学校、そして大学に準じる「コレギウム・アカデミクス」といった組織を取り込んだ、国家的施設であった。同修道院の規約によれば、「朝課合唱団」は、十数名の奨学生から構成されていた。かつて「貧民聖歌隊 *De armen Sanckscholere* (ママ)」と呼ばれたこの合唱団は、朝課と晩課で「日々の仕事」をこなすほか、「交響合唱団 *Chorus symphonicus*」、すなわち高度な多声音楽を歌う約20名のメンバーからなる合唱団にも加わった。1700年5月の朝課合唱団報酬リストには、9番目にバッハの名が見られ、12グロッシェンを受け取ったことになっている。ちなみに、その目録によると、3名のメンバーがそれぞれ1ターラー、2名が16グロッシェン受け取った。また、12名のメンバーのほかに、ふたりの「候補生」(ただし無記名)も掲げられている。<sup>29)</sup>

バッハもまた朝課合唱団で歌う傍ら、コルス・シュンフォニアクスにも参加していたのだろう。従来バッハ研究では、バッハはその特別に美しいソプラノの声でリューネブルクの合唱隊に喜んで迎

えられた。ところがあるとき合唱隊で歌っていると、意志に反して歌うべきソプラノの声がオクターブ低い音とともに聴こえた。以後、バッハはソプラノの声域を失ったとする、リュネブルクで変声を迎えたという推論が主であった。ところが、フライブルク大学教授コンラート・キュスター Konrad Küster は、近年の研究で、リュネブルクの朝課合唱団が求めていたのは、ソプラノではなくバス歌手であった、オーアドルフを去ることとなった理由の一つは、優秀なソプラノ歌手として優遇される理由がなくなったからであろう、そうすると、バッハの変声はリュネブルクではなく、オーアドルフですでに起きていたという新たな説をたてている。<sup>30)</sup>

バッハの変声がいつ頃であったかは正確に知ることはできないが、15歳は変声の微妙な年齢であり、また、変声は徐々に進むものであるから、コルス・シュンフォニアクスで合唱パートのポジションが変わっていったのではないかと考えられる。変声は少年合唱にとって避けて通ることのできない大きな課題の一つであり、それぞれの聖歌隊が変声に対する独自の対応策をもっていたに違いない。いずれにせよ、ルターもバッハも成長と共に少年合唱から男声合唱の分野へと進んでいったであろうことは、容易に想像される。

#### 4. クレンデの辿った道

30年戦争（1618～1648）の困窮の時代は、クレンデの歌が持つ音楽的価値と内容が、純粋に隣人愛的な価値と内容であったために、クレンデの活動はますます遠ざけられた。30年戦争によってドイツの人口は3分の1に減少したといわれる。物心共に荒廃した時代の中で、クレンデは存在の意義すら問われず、ないがしろにされたのであろう。

クレンデ団員に対する過大な要求やクレンデを廃止しようとする動きに加えて、寄宿舎における規律の緩みは、より深刻な打撃であった。その上、社会的に軽視されていたクレンデは、貧しい葬式の時にのみ指名され、何度も駆り出された。クレンデの活動は、下僕の仕事や掃除の仕事、下働きの職務のために生徒を育てるかのように無意味化し、退廃した。古い教会音楽と学校との関係の復興を急がせたところでは、無意味化や退廃は、効果的に対処されたが、中部ドイツ、北ドイツの敬虔主義は、敬虔で家庭的な祈りの歌を求めていたので、クレンデの慣習には好意的ではなかった。多くの場所で巡回音楽 *Musica circularis* を制限する試みが行われた。

ヴィンツハイムにおいては、1656年以来、クレンデは2人の寄宿生のみで成立していたが、1704年から漸くすべての寄宿生に歌って回ること *Umsingen* への参加が許された。

学校と教会の分離により、学術的な教育施設へ移行したラテン語学校では、教会の職務は歓迎されず、異質な授業妨害とされた。その結果、音楽授業の軽視と共にクレンデの存在は、最も深刻な事態、即ち、存続か廃止かという大きな課題に突き当たった。それにも拘らず、歌って回することは、何世紀もの古い伝統を持つ教会音楽の中心において、ライプツィヒ或いはドレスデンのような都市では、およそ18世紀の終わり頃まで衰退を免れた。

ハレにおいては、激減させられたクレンデは、1754年以来、わずかに教会で歌うだけで、もはや道路において歌うことはなかった。フレーンスブルクにおいては、1760年にクレンデをラテン語学校からドイツ語学校に移した。シュパイアーやエスリンゲンのような帝国都市においては、寄宿舎のクレンデのメンバーは、18世紀に器楽にも関与させられ、路上の歌は中断を余儀なくされた。けれども、クレンデの制度を生かしておくために、生徒たちは、時折は地方にも行った。トゥールガウではつい

に、1822年に終わりをみた。<sup>31)</sup>

ところが、クレンデの活動は、自宅での音楽活動が家庭生活の重要な部分になりつつあった市民階級の、生活様式の変化に伴う意識の変容という圧迫にも拘らず、いくつもの場所で、19世紀までも、例えばイエーナにおいては現代まで持ちこたえたのである。

しかし1800年頃の啓蒙主義の教育学は、クレンデ活動の在り方に否定的であり、ゲッティンゲンの古代研究者クリスティアン・ゴットローブ・ハイネ Christian Gottlob Heyne (1729～1812) もまた、強硬な廃止意見を述べた。

1804年に路上の歌が、音楽的、宗教的教化のためというよりは、虚栄心を充足するためにのみ行われているのが見られたバイエルンにおいては、1810年に、クレンデはバイエルン国王政府の信条により、教育や授業とは相容れないとして禁じられた。

解放戦争の後に起こった再興運動は、典礼と教会音楽の復活の努力の中で、クレンデにも再び関心を寄せた。すでに3月前期において、クレンデ活動を復興するための最初の試みが始まった。<sup>32)</sup>

ここに挙げられた多くの地名から、クレンデの活動はドイツ各地広範囲に活動していたこと、また、様々な困難や制約に出会いながらも綿々と続いてきたことが読みとれる。持ちこたえ得た力の源は何であったのか。路上の歌が民衆に必要とされたのか。無論、喜捨を乞ねばならない貧しさという必然性があったと思われるが、クレンデは、托鉢修道会の用語 Almosensammeln と共に、その清貧の思想をもまた引き継いだのであろう。修道士の説教に対するようにクレンデの歌に喜捨を与えた民衆は、善意の施しをすることにより功德を積む。その相互扶助の構図が、世紀を超えて持ちこたえ得た力の一要因であったかもしれない。一方、ピアノ・フォルテが開発され、裕福な家庭を中心にピアノが普及し、家庭音楽が重視されるようになった啓蒙の時代に、子どもたちが金品を乞うために歌うことの是非を問われれば、認可すべきではないという否定的な見解があったであろうこともまた、想像に難くない。

## 5. 受け継がれた歴史

### (1) Volkskurrende と Neue Berliner Kurrende

苦難の歴史が続いたクレンデが現在どのような状況にあるのかについて述べておきたい。前項ではドイツ諸地域におけるクレンデの状況を断片的に述べることはできなかったが、ここでは MGG の記述を手がかりに、引き継がれたクレンデの歴史として、ベルリンのクレンデを重点的に取り上げる。周知のように、ベルリンは1871年のドイツ帝国成立から1945年の第2次世界大戦の終結まで首都であった。戦後の冷戦時代に東西に分断され、東ドイツの首都である東ベルリンと西ドイツに属する西ベルリンとなるが、1990年に再統一された。MGG の記述は以下のように続く。

ツェルターの弟子ゴットフリート・エミール・フィッシャー Gottfried Emil Fischer が、1831年にベルリンで単声の路上合唱と多声の路上合唱 Straßenchor を擁護した後で、Volkskurrende (4声の混声) と、Neue Berliner Kurrende (グラウエン・クロースター・ギムナジウムの生徒によって構成される3声の少年合唱) の、(両者とも1852年の設立である) 創立者であるベルリンの学校長ヨーハン・フリードリヒ・マルクヴァルト Johann Friedrich Marquardt (1810～1893) が、19世紀半ばに新しいクレンデ概念の行動力ある促進者となった。

この合唱団のレパートリーは、17、18世紀のモテットの他に、主にツェルターとグレルのモテットの作品から構成されていた。1900年頃クレンデの歌の指導的理念、その一般的な芸術的民衆教育の指導的理念は、音楽分野における、とりわけヘルマン・クレチュマール H.Kretzschmar に由来するように、クレンデの歌の民衆教化的、そしてキリスト教的伝導思想へと進んでいった。<sup>33)</sup>

この記述を読む限りにおいては、グラウエン・クロースター・ギムナジウム Evangelisches Gymnasium zum Grauen Kloster の学校長であるヨーハン・フリードリヒ・マルクヴァルトが、ギムナジウムの生徒たちによって4声の混声合唱団と3声の少年合唱団を組織し、それぞれに Volkskurrende、Neue Berliner Kurrende と名付け、合唱団を発足させたということである。新しいクレンデの概念ということは、巡回音楽や路上合唱ではなく、合唱団の概念として Kurrende の言葉を使ったということであろう。

グラウエン・クロースター・ギムナジウムは、1574年に創立されたベルリン・ミッテ地区にある、現在は男女共学の高等学校である。その名の通り、グラウエン・クロースター（修道院）が母胎となっている。この学校に今、Volkskurrende と Neue Berliner Kurrende が存在し、活動しているかどうかは、残念ながら現段階では確認できていないが、後述するベルリン大聖堂聖歌隊の歴史の中に「1622年、作曲家ヨーハン・クリューガー Johann Crüger が、ニコライ教会の音楽監督、グラウエン・クロースターの教師、そしてクロースター・クレンデの指揮者として、公職に就任した<sup>34)</sup>」とあるので、この両者の間には、何らかの関わりがあることが推測できる。

上で引用した MGG の記述に登場するカール・フリードリヒ・ツェルター Carl Friedrich Zelter (1758～1832) は、ベルリンに生まれたドイツの作曲家・指揮者・音楽教育家である。プロイセン宮廷音楽家カール・フリードリヒ・クリスティアン・ファッシュ Carl Friedrich Christian Fasch の弟子であり、ファッシュが1791年に創設した混声合唱協会、ベルリン・ジング・アカデミーの副指揮者を務め、1800年にファッシュが没した後はジング・アカデミーの第2代指揮者、監督となった。ツェルターは、ベルリン音楽界の重鎮として18世紀後期以降のベルリン及びドイツの音楽活動に大きな影響を及ぼした。また、作曲家としても広く知られており、ゲーテとの深い親交と文通がきっかけとなって生まれたゲーテの詩による歌曲は、ベルリン歌曲楽派の形成において重要な役割を果たした。

ツェルターが、ベルリン・ジング・アカデミーを通じて、バッハ一族の遺産を受け継ぎ、バッハを積極的に取り上げたことは、その音楽に刺激された弟子のメンデルスゾーンによる《マタイ受難曲》蘇演にも繋がり、19世紀におけるバッハ復興の大きな礎石となった。

ツェルターの弟子ゴットフリート・エミール・フィッシャーが、ベルリンの路上合唱を擁護したのは、何故だったのだろうか。19世紀ドイツでは男声合唱が盛んであった。ベルリン・ジング・アカデミーに代表されるように、大都市だけでなく、至る所に男声合唱団ができ、男たちは定期的集い、歌った。この時代のドイツ最大の政治課題は「祖国ドイツの統一」であり、男声合唱運動は、音楽的楽しみや芸術的高揚を求めるといよりはむしろ、社会的、政治的運動だった。大人が夢中になって歌っていたこの時期、子どもたちはどうしていたのか。Kurrende 擁護との連関はなかったのだろうか。ただ単に合唱活動を擁護したのだろうか。ツェルターの業績は、ベルリンのクレンデ擁護に何らかの影響を与えたのだろうか。疑問が次々と浮かぶが、次項において、疑問解決の一つをベルリン大

聖堂少年合唱団の分析の中に求めたい。

## (2) ベルリン大聖堂聖歌隊 Staats- und Domchor Berlin

ベルリン大聖堂 Berliner Dom は、ベルリン・ミッテ区にあるホーエンツォレルン王家の記念教会である。1415年に、ホーエンツォレルン家出身のニュルンベルクのフリードリヒ伯爵がブランデンブルク選帝侯フリードリヒ I 世に定められたときからその歴史は始まる。聖歌隊は、王立王宮大聖堂聖歌隊 Königlicher Hof- und Domchor Berlin として、活動を始めるが、1918年、ヴィルヘルム II 世の退位と共和制の告示の時に、行政官庁の管轄下におかれ、国立大聖堂聖歌隊 Staats- und Domchor Berlin へと変わった。大聖堂は、1822年には、ベルリン・ジング・アカデミーを設計したカール・フリードリヒ・シンケルによって改築がなされた。

第2次世界大戦中1944年に、大聖堂は戦禍によって大きな打撃を受け、合唱団の活動は休止となる。更に、ベルリンの壁構築により、大聖堂聖歌隊は伝統的な活動の場所を失ったばかりでなく、街の東部分に住んでいた聖歌隊構成員も失うことになる。大聖堂聖歌隊の活動拠点は、30年間、暫定的にカイザー・ヴィルヘルム教会となった。ベルリン大聖堂聖歌隊もまた、歴史の大きな変遷を経過して今日に至り、現在はベルリン芸術大学に属する国の機関として活動している。また、第2次世界大戦時に打撃を受けた大聖堂は、1993年に修復され現在の姿を取り戻している。

ベルリン大聖堂少年聖歌隊は、現在団員数300名を擁する。総合音楽監督は、ベルリン・ジング・アカデミー第10代監督も務めるカイ・ウーヴェ・イルカ Kai Uwe Jirka である。

聖歌隊の練習は週3回、年齢別のグループで行われている。練習場所と時間はそれぞれ異なり、担当指導者も異なる。練習時間は発達段階に応じて、5歳児のクラスが45分間、ミドルクラスが60分間、コンサート合唱団になると90分間など、下記の表の通りである。指導者陣は総合監督イルカのメソッドのもと、ベルリン大聖堂聖歌隊としての高度な水準を求めて、低年齢のクラスからコンサート合唱団まで一貫した練習や活動を行っている。変声したら“adult”として“Vocis”のグループに加わる。変声期間中はあまり歌わず、理論の勉強をする。ある日の練習計画表からベルリン大聖堂聖歌隊概要の把握を試みる。

2011年10月28日の練習計画表<sup>5)</sup>

	グループ名	年齢	人数	練習時間
1	Dominis B (LtG. MS)	5 歳	30人	45分
2	Chorschule (CS) 1s (LtG. MS)	6、7 歳	15人	60分
3	Chorschule (CS) 1g (LtG. GG)	6、7 歳	15人	60分
4	Chorschule (CS) 2a (LtG. MR)	6、7 歳	15人	60分
5	Kurrende I (LtG. SK)	8 歳	30人	90分
6	Kurrende II (LtG. CL)	8 歳	20人	90分
7	Kapellknaben (KK) (LtG. MR)	9～11歳	60人 (少年40) (成人20)	90分
8	Konzertchor (KC) (LtG. KUJ)	11歳～変声期、	60人 (少年40) (成人20)	ソロ 60分 合唱 90分
9	Vocis (LtG. MK)	14～16歳、 変声期、adult	25人 (少年20) (成人5)	理論 60分 歌手 60分

練習計画表によると、Dominis B とあるので、この日の練習予定にはないが、A も存在するのではないかと推測される。そうすると、全部で10のグループが存在することになる。以下は、それぞれのグループの年齢、指導内容、並びに特徴である。

Dominis は、5 歳児のグループである。音楽の早期指導は、就学前の年齢に始まるとの理念から、遊びの中で、音や音色、リズムに親しませ、音楽性を育む。

Chor-Vorschule は、6、7 歳児グループである。Dominis を終えた次の年から声が教育される。ここで、音楽理論の基礎を伝える。

Kurrende は、8 歳児グループである。子どもたちは、自分自身の音域を知り、ソプラノ、またはアルトに編成される。多声音楽を学び、対外的公共演奏会に出演できる。

Kapellknaben は、9～11歳児グループである。この段階になって初めて、子どもたちは男声メンバーと共に歌い、混声合唱を学ぶ。聖歌隊は、ミサに出演したり、小さな演奏旅行に参加したりすることを許される。

Konzertchor は、11歳からのグループである。およそ40人の少年と20人の男声が大聖堂聖歌隊を構成している。少年たちは、このグループで変声まで歌い、中心的聖歌隊として、大聖堂礼拝の音楽部分を担当する。そして、国内外の演奏旅行を実施する。

Vocis は、変声期間中の少年たちと成人男性のグループである。少年たちは更に理論的な知識を学び、声は慎重に育成される。そして、変声後の新しい音域において、最初の歌を歌うことに挑戦する。

年齢別のグループ編成や練習時間の設定、ソロ (Solo) 指導や、歌手 (Sänger) としての指導から、入門的指導から専門的指導まで、少年の発達段階を踏まえた丁寧で効果的な指導が行われていることが窺える。変声を迎えた少年たちへのきめ細かな対応や配慮からは、「変声によって朝課合唱団において優遇されなくなった」バッハの変声との大きな違いを認めざるを得ない。更に、変声を含め、成長に従って上のクラスに進むことにより、練習内容が順を追って高度になっていく方式や、国内外の演奏旅行に参加できるなどの活動の充実は、団員各自がそれぞれに目標を持ち、上のクラスに進もうとする意欲の向上に繋がっていると思われる。

ここで注目すべきは、5 番目と6 番目のクラスに、クレンデの名称が使われていることである。数多くのグループがあるにもかかわらず、8 歳児グループを表す言葉として、路上合唱の意味ではないが Kurrende I、Kurrende II として使われていることは、ラテン語学校のクレンデが低学年を中心としたものであったことと重ね合わせて興味深い。ここでは路上合唱の意味はなくなり、合唱並びに合唱団概念を表す言葉として変化し、ドイツの人々でさえ、Kurrende の語源を考えることなく、殆ど疑問を抱かず使用しており、言葉の持つ概念が変化して使われていることが明らかである。けれども、5 歳児から始まるベルリン大聖堂聖歌隊員としての養成教育は、Kurrende を経て、中心グループである Konzertchor を目指して行われているのである。

## 6. ドイツの少年合唱団

ドイツでは中世以来、各地でクレンデの活動が行われていたと思われる。クレンデだけでなく、ドイツの少年合唱は、教会音楽の活動や運営における必要不可欠の大きな役割を担ってきており、また今も担っていると言える。Willkommen bei knabenchoere.de<sup>36)</sup> というサイトには、現在48団体のドイツの少年合唱団が掲載されている。このサイトは我が国でいうところの「全日本少年少女合唱連盟」

のようなものであると推測されるが、ドイツ語圏の少年合唱団を集約したものである。連盟に参加せず、独自で活動をしている団体が他に存在しないわけではないだろうが、協会 Verein を重んじてきたドイツの国民性に鑑みると、一般的な活動をしている団体は、ほぼ登録されていると考えられる。掲載団体の分布を調べてみると、東西南北ドイツ全土に存在していることがわかる。(図4)

少年合唱団というともまず思い浮かぶのは、一般的にはウィーン少年合唱団である。そのウィーン少年合唱団が属するオーストリアの少年合唱団の数が6団体、スイスの少年合唱団が5団体とある。3国の人口を考えれば、ドイツの団体数が突出していると、断定はできないが、48という団体数は多いと言えるに違いない。

このことは、ドイツ全土で活動していたクレンデの活動と無関係ではないだろうと思われる。言い換えれば、ドイツは歴史的に、領邦国家や独立国家など都市が分立し、それぞれの領邦国家は教会を中心に発展し、その教会には付属聖歌隊が存在し、活動していた。ここに、クレンデから連なるドイツ少年合唱の起源を見ることが出来るのではないだろうか。



(図4)  
ドイツの少年合唱団分布図

ドイツは少年合唱ばかりでなく、合唱音楽が盛んであった歴史を持つ。ドイツの国民性や社会の在り方が、合唱音楽と深く関わってきた。ルターによってコラールが誕生し、教会に集う会衆は祈りの言葉を歌うことを知った。作曲家であり、オルガニストであり、音楽理論家でもあったミヒャエル・プレトリウス (1571~1621) は、合唱概念を作品名に用いた最初の人であった。<sup>37)</sup> その後、ドイツ・バロック初期の作曲家ハインリヒ・シュッツ (1585~1672) は、「合唱」という言葉を初めて宗教的音楽のタイトルに使い、シュッツが指揮したドレスデン宮廷合唱団は、シュッツの受難曲の最初と最後の部分、並びに群衆の言葉の部分合唱を受け持った。<sup>38)</sup> 1791年には、ファッシュによってベルリン・ジング・アカデミーが創設され、18世紀から19世紀にかけてのドイツでは男声合唱が隆盛を極め、1862年にドイツ合唱同盟が成立した。このような歴史を重ねてきたドイツの合唱音楽は、高い音楽性を持った幾多の合唱団によって受け継がれ、発展してきた。

## 終わりに

中世から19世紀の初頭までという長い年月、クレンデの活動は、形を変え、時には存在意義も変化したつつ存続してきた。唯一変わらないのは、7歳くらいから変声前後までの少年たち、そして青年前期の少年たちが歌い継いできたということである。少年たちにとって、歌うことは楽しみでもなく、教養のためでもなかった。パンを得るための仕事であったが、歌うことによる精神の浄化を体験することがあったに違いない。成瀬は記述する。

もとより学校といっても、時は15世紀の末、それもドイツの田舎町のことである。寺子屋みたいなお粗末なもので、科目といえば読み書きと唱歌、それにラテン語だけであった。中でもラテン語がいちばん重視されたのは(初等学校のことをドイツではラテン語学校ともいった)、そのころ少し高級な職業に就くにはどうしてもこれが必要だった以上当然のこととして、唱歌が第2

番目に大事な科目だったと聞くと、今日のわれわれにはいささかびったりこない。しかし、教会というものが民衆の生活と密着していたその時代、学校の生徒たちはなにか式典のあるたびごとに合唱隊を組んで「天使のように」歌わねばならぬしきたりだったのである。<sup>39)</sup>

「天使のよう」と形容されながら、少年たちの実情は苛酷なものであった。苛酷な生活から生まれたがゆえに、その声は民衆を宗教的昂揚へと導いたのであろうか。再度『卓上語録』から引用すると、ルターは、音楽を最大のもの、真に神の贈り物としており、音楽に関する話題は多い。

音楽は不安な人には最大の慰めである。その人がたとえほんの少ししか歌えないとしても。<sup>40)</sup>

そして、歌うことに関するルターの思い入れが伝わってくる記述として、

わたしはつねに音楽を愛してきた。音楽を理解する者はよい性格である。音楽は学校においても必ず学ばなければならない。教師は歌うことができないならない。さもなければ〔教師として高く〕評価しない。若い聖職者は叙階される前に、学校にいる間に〔歌う〕練習をしなさい。<sup>41)</sup>

歌うことは繊細な高貴な技であり、修行である。この世とは関係なく、〔この世の〕商売の市場では行われない。歌う者は憂えることなく、喜びに満ち溢れ、すべての心配事を忘れさせる。<sup>42)</sup>

などを認めることができる。懐かしい町アイゼナハを歌い歩いたクレンデの体験は、生涯、歌うことに重きをおいたルターの姿勢に繋がったのであろう。根底にあるものは原始以来人々が連綿と紡いできた「歌うということの力」というものであったのだろう。

苛酷な毎日の中で、社会の大きな変動に翻弄されつつ、大人たちが、存続や廃止を声高に論議した時代、クレンデの少年たちは何を思っていたのだろうか。存続か廃止かという議論は、歌っている当事者の少年たちからではなく、大人たちの思惑から生まれたものであっただろう。中世以来現在に至るまで、クレンデの言葉は生き続け、少年たちは、変声を迎えようと、幾多のトラブルがあろうと歌い続けてきた。少年たちが歌うことによって得た喜捨の殆どは教会のものであり、少年たちの手元に渡ったのは、ごく僅かであっただろう。だが、少年たちは、ドイツ合唱音楽の一端を担い、歴史を紡いできた。このように、教会音楽において少年合唱は、なくてはならないものであった。女性が教会で歌えなかった時代、ディスカントを受け持ち、それはやがて多声音楽の発展へと繋がり、合唱音楽の幅を広げたのである。

1) Kurrende aus Wikipedia, der freien Enzyklopädie.

<http://de.wikipedia.org/wiki/Kurrende.2011.04.08>. 取得

2) Die Musik in Geschichte und Gegenwart. Allgemeine Enzyklopädie der Musik (=MGG). Unter Mitarbeit



- zahlreicher Musikforscher des In- und Auslandes. Hrsg. v. Friedrich Blume. Elektronische Ausgabe der ersten Auflage (1949-1986). Berlin: Directmedia 2001. Digitale Bibliothek Bd. 60, Kurrende, S. 44309 ff.
- 3) Wuppertaler Kurrende. ノルトライン＝ヴェストファーレン州で活動している少年合唱団。Willkommen bei knabenchoere.de というサイト <http://www.knabenchoere.de/> によると、ドイツの少年合唱団48団体中ただ一つ Kurrende を団体名に使用している。
  - 4) MGG. S. 44309 ff.
  - 5) 同上
  - 6) ハンス・フリードリヒ・ローゼンフェルト／ヘルムート・ローゼンフェルト『中世後期のドイツ文化－1250年から1500年まで』鎌野多美子訳（三修社、1999）、p. 179.
  - 7) 教皇インノケンティウス3世が招集したローマのラテラノ宮殿で行われたカトリック教会の代表による公会議。かつてないほど多くの参加者がヨーロッパ中から集まり、古代の公会議に匹敵する大会議が実現した。
  - 8) ハンス・フリードリヒ・ローゼンフェルト／ヘルムート・ローゼンフェルト前掲書、p. 180.
  - 9) マルティン・ゲック『バッハ』（音楽之友社、1995）、p. 16.
  - 10) ヨルダン社『原典宗教改革史』年表では1498年から1501年、MGG では1497年から1501年となっている。
  - 11) ゲック前掲書、p. 18.
  - 12) MGG. Kurrende, S. 44312.
  - 13) ゲック前掲書、p. 25.
  - 14) 樋口隆一『バッハの風景』（小学館、2008）、pp. 23-24.
  - 15) 現在も10月31日の宗教改革記念日には、ルター派の各地の教会で、宗教記念の礼拝のときに、広く知られている「神は我がやぐら」が会衆たちによって歌われている。
  - 16) <http://de.wikipedia.org/wiki/Kurrende.2011.04.08>. 取得
  - 17) エリク・ホーンブルガー・エリクソン『青年ルター』大沼隆訳（教文館、1974）、pp. 143-144.
  - 18) Ursula Cotta aus Wikipedia, der freien Enzyklopädie  
[http://de.wikipedia.org/wiki/Ursula\\_Cotta.2011.09.14](http://de.wikipedia.org/wiki/Ursula_Cotta.2011.09.14). 取得
  - 19) 成瀬治『ルターと宗教改革』（誠文堂新光社、1980）、p. 19.
  - 20) ルターが客人や友人たちと食卓を囲んで語ったとされる語録集。幼少時代や信仰に至る経緯、家庭生活など、ルター自身による伝記的資料。
  - 21) マルティン・ルター『卓上語録』植田兼義訳（教文館、2003）、p. 14.
  - 22) 同上、p. 376.
  - 23) ハンス・フリードリヒ・ローゼンフェルト／ヘルムート・ローゼンフェルト前掲書、pp. 312-313.
  - 24) 第4ラテラン公会議において承認された規範XI。総ての司教座教会と教区教会においては、聖職者並びに貧しい生徒に対して、無料で十分な教育を施さなければならない。
  - 25) MGG. Kurrende, S. 44311.
  - 26) 同上
  - 27) 樋口前掲書、p. 59.
  - 28) MGG. Kurrende, S. 44313.
  - 29) マルティン・ゲック『ヨハン・ゼバスティアン・バッハ』第I巻「生涯」、小林義武監修、鳴海史生訳（東京書籍、2001）、p. 98.
  - 30) 樋口前掲書、pp. 56-58. 参照
  - 31) MGG. Kurrende, S. 3参照 pp. 44313-44316.

- 32) MGG. Kurrende, S. 3参照 pp. 44316-44318.
- 33) MGG. Kurrende, S. 44317.
- 34) Peter Hahn "Staats- und Domchor Berlin" Oase Verlag, 2004, p. 48.
- 35) 2011年10月17日にベルリン大聖堂聖歌隊指導者 Alexander Zörnig 氏より入手
- 36) <http://www.knabenchoere.de/>
- 37) *Urano-Chorodia* (1613年)  
MGG. Chor. IV . Protestantische Chorpraxis in Renaissance und Barock, S.13377 ff.
- 38) *Geistlichen Chormusik* 宗教的合唱曲 (29曲のモテット) SWV369-397 (1648年)  
MGG. Chor. IV . Protestantische Chorpraxis in Renaissance und Barock, S.13377 ff.
- 39) 成瀬前掲書、p. 19.
- 40) ルター前掲書、p. 376.
- 41) 同上、p. 377.
- 42) 同上、p. 379.

## Eine Quelle des deutschen Knabenchors, am Beispiel der Kurrende

Inoue Hiroko

Unter Kurrenden versteht man die vom Mittelalter bis zum frühen 19. Jahrhundert vornehmlich aus bedürftigen Knaben der unteren Klassen der Lateinschulen gebildeten Chöre. Die vorliegende Abhandlung behandelt die Entstehung der Kurrende, die Eisenacher Kurrende, den historischen Hintergrund der Kurrende, ihre Geschichte im Mittelalter, in der Reformationszeit, den Gesang in der Kurrende. Der Staats- und Domchor Berlin führt teilweise die Geschichte der Kurrende fort. Gegenwärtig gibt es sehr viele Knabenchöre in Deutschland. Es besteht Grund zu Annahme, dass sich der Begriff der Kurrende später mehr oder weniger auf alle mit einem öffentlichen Auftrag versehene Chöre ausdehnte, unabhängig von ihrer Zusammensetzung und näheren Zweckbestimmung.